

【病院病理部】

I. 研修実施責任者 野村 浩一

II. 臨床研修到達目標 (Phase I)

1. 一般目標 (GIO)

病院病理部業務 (診断業務) の流れを知り、病理検体処理の基本的知識を身につける。

2. 行動目標 (SBO) (経験目標)

1) 中央診療部門である病院病理部の病院内での位置づけを知る。

2) 病理部内のスタッフ・部屋割り (配置) を知る。

3) 病理診断業務の内容・流れを知る。

採取された病理検体を正しく扱うことができる。

検体のマクロ観察の基本を身につけている。

検体の標本化過程を理解している。

4) 検体取り扱い及び診断業務上のリスクマネジメントを知る。

5) 環境バイオハザードを知る。

6) 病理剖検の目的を理解している。

3. プログラム (第 1～4 週) :

研修指導医を中心とした教職員の指導のもと、病院病理部の業務全般に参加

1) 病院病理部を中心に、院内部内の業務フローチャートを理解する。

2) 診断業務 (剖検・組織診・細胞診・術中迅速診断) に参加し、実践・経験を積む。

①組織診：生検検体，手術検体，ならびに特定臓器検体（肝、腎、骨髄、骨格筋、
神経、心筋等）を、区別して処理

②細胞診：擦過，吸引，穿刺，塗抹，捺印，採取，洗浄等の検体を、区別して処理

③生検・手術材料：

依頼伝票の照合・固定処理確認

臨床情報をもとに切出し作業（処理，カラーコピー記録，マクロ所見・撮影）

標本作製過程（固定－脱脂脱水－包埋－薄切－染色－封入）

診断過程（検鏡・検閲・報告書作成・規約診断・データベース化・報告書送信）

④病理剖検：

剖検受付，準備

剖検手順：臨床情報把握・オリエンテーション

肉眼観察・取出し・切出し・固定・マクロ撮影

- 後片付、マクロ所見・診断記録、整形、標本作製、組織診断報告書作成
- 3) 業務上で生じるリスクとそれに対するマネジメント、バイオハザードとそれに対する予防・対応に関与する。

III. 臨床研修到達目標 (Phase II)

1. 一般目標 (GIO)

病理診断の基本的知識を身につけ、疾患の鑑別能力を高める。

2. 行動目標 (SBO) (経験目標)

- 1) 顕微鏡を正しく使用し、プレパラートを正しく評価する観察力を身につける。
- 2) 組織像から疾病の理解に到達する筋道を論理的に説明できる。
(所見－根拠－診断・病態把握)
- 3) 病態から要求される適切な病理検査法を選択できる。
 - ①一般染色（組織診：HE 染色、細胞診：Papanicolaou 染色、剖検：Masson 染色）を基本に、鑑別疾患・確定診断のため、特殊染色・免疫組織化学染色・電顕検索等を付加できる。
 - ②生検に要求される病変の観察法を知っている。
 - ③各臓器腫瘍の取扱規約の概略を知っている。
 - ④免疫組織化学染色、電子顕微鏡検査の運用と診断学の概要を知っている。
- 4) 顕微鏡ミクロ画像撮影を習得する。
- 5) 病理におけるバイオハザードの対応を知っている。

3. プログラム (第 5～8 週)

- 1) 検体の切出しと一定数の病理組織診断に参加、特殊染色の習得とそれによる組織鑑別法を理解する。
 - ①組織診・細胞診検体の切出しと検体処理を行い、顕微鏡下で検体内容を確認する。
 - ②実際に標本作製過程（包埋－薄切－染色等）に参加し、自ら標本を作製する。
 - ③自験例について、一般染色のみならず特殊染色・免疫組織化学染色も実践し、診断に供与する。
 - ④電子顕微鏡の検索は、腎生検症例などで組織と対応させつつ、観察する。
- 2) 規約診断学に則った実地診断を研修する。
 - ①病理形態学・生検診断学ならびに各種臓器腫瘍の取扱規約に準拠して、鑑別診断を挙げ、病理診断を行う。
 - ②病理診断（組織診）報告書を下書きし、検閲を受け、診断報告書を出す。
臓器コードおよび疾患コード (ICD10) を記入する。
 - ③肝、心、腎、肺、造血器、神経などの特殊生検材料の診断学の実際を習得する。
 - ④免疫組織化学染色および電子顕微鏡による診断技法の基本を習得する。

- ⑤必要に応じて、ミクロ画像撮影を行う。
- 3) 細胞診は同一症例の組織診と対比する。
- 4) 剖検の基本手技とマクロ観察法を習得する。
 - ①自験例についてマクロ所見とマクロ診断をまとめる。
 - ②バイオハザードに対し正しい対応ができるような判断能力を身につける。

IV. 臨床研修到達目標 (Phase III)

1. 一般目標 (GIO)

臨床検査データや画像所見も加味し、組織や個体レベルの総合的診断力を身につけ、臨床医に提言のできる病理医を目指す。

2. 行動目標 (SBO) (経験目標)

- 1) 組織診・細胞診について、全科の症例を経験し、診断能力の幅を広げる。
特に、鑑別診断のための特殊染色など、病理学的な補助手技の運用を知っている。
- 2) 剖検自験例のミクロ診断を行い、マクロ診断と総合して、最終剖検診断をつける。
 - ①剖検診断過程で、個体病理学・器官病理学を学ぶ。
 - ②剖検例の生検（組織診・細胞診）所見を検討し、剖検時の所見と関連付ける。
- 3) 術中迅速診断法の基本を理解し、その適応と限界を知っている。
- 4) 細胞診検査の概略とその効用を説明できる。
- 5) カンファレンスやCPCへ参加し、臨床情報をもとにした症例の理解を更に深める。
- 6) 誤診・個人情報漏洩・訴訟等リスクに対するマネジメントを再確認する。
- 7) 病理業務のIT化を検討する。

3. プログラム (第9～12週)

- 1) 外科系・内科系各科の組織診症例（細胞診症例）を経験し、所見・診断を下書きして、検閲を受ける。諸種の疾患に対する病理学的検索の適正な手法を選択できる。
- 2) 剖検自験例について、マクロ所見・診断とミクロ所見・組織診断を統合させて、総合的に最終剖検診断をつける。
- 3) 凍結切片像とパラフィン切片像の差違を習得する。
- 4) カンファレンスにおいて、マクロ画像・ミクロ画像とともに生検診断結果を提示し、臨床との間で症例検討を行う。
- 5) CPCに参加し、場合によっては症例の剖検診断結果を提示し、臨床所見との間で症例検討を行う。病理診断と個体的疾病理解に関する総合ディスカッションを行う。
- 6) 医療安全推進室に関連した症例やインシデント症例を通じて、リスクマネジメントの方法・注意点を検討する。

7) 病理業務の IT 化(病理支援システム・ヴァーチャルスライドシステム等)を検討する。